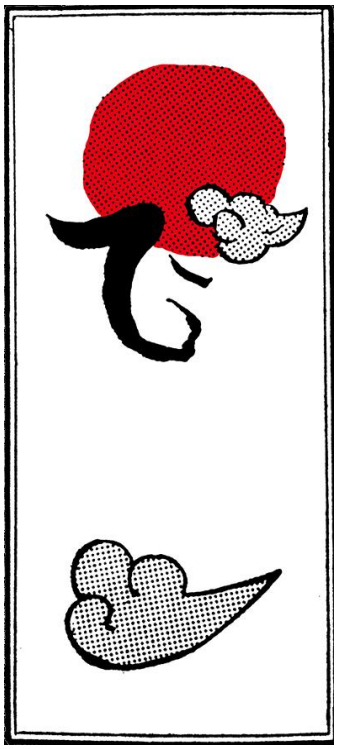

第 32 号
月 1 回 発 行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所:愛媛県西条市
上市甲 720-1
TEL:080-2986-0856

領　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道(十一)(大和世界の建設)

竹葉 秀雄

古事記

宇宙の創始

―ロゴス Logos―

ロゴスは、「言葉」のギリシャ語である。そこからして、ギリシャ哲学では、言葉のさす「意味」、言葉を使用する人間の「理性」、さらに理性のとらえる客観的事物の「定義」「本質」「概念」「法則」「理法」などの意に用いられた。とくに有名なのは、ヘラクレイトスやストア派の説いた火の運行の理法としてのロゴスや、フィロンや新プラトン派の神の思想内容の総称としてのロゴスや、前述した「ヨハネ伝・福音書」に始まるキリスト教義での「神の子」「神の言」としてのロゴスなどである。(全世界大百科事典)

言葉(ロゴス)は不滅の本体である、とするものもあり、道を「ことば」としてロゴスとするものもある。ギリシャ人はそれを理性の声と考えたし、ユダヤ人はそれを神の自意識と解釈した。世界はロゴスによって成立し、ロゴスによって統べられているとしている。これは天之御中主神の世界である。ヨハネ伝・福音書は、ロゴスが神の生きたすがたであり、あらゆるものの生命であり、人間の光明であると考えている。これは天照大御神の世界である。

ファウストはその太初は何か、に先ず悩んだ。「言葉」を太初のものと評価することも満足できず、「こころ」と解することも意にみたず、「力」と書いてみたが、不完全な気がするし、結局彼は、神のたすけだ!即ち霊感によって「行い」と書いて安心したのである。永遠に生成してやまないもの、神の実体は行為であるとした。ゲーテは宇宙の根元を求めて、新約のロゴスを「言葉」では満足できず、「意」「力」「行」と思考し、遂に「行」に安心を得たのである。王陽明は霊感によって「良知」と悟って手の舞い足の踏むところを知らなかった。私はここで先ず法華経方便品にある「十如是」を思う。

第三章 農民生活の倫理的考察

～第三節 老農的態度～

菅原 兵治

何が何だか分らぬ

世間の人々からは、「何が何だか分らぬことをいう年寄りだ」と言わるる中に、実は科学（分科的な学問）や技術（枝葉の様な表う面的な術）の分析的研究の解剖刀では解剖し尽されない玄奥なるもの―生命それ自体―に直入しての「何が何だか分らない」超分析的証語があるのである。私共はかかる老農の言行を尊び、而してこれが納得理解の出来るまでの修行を積まねばならぬ。

「心焉に在らざれば視れども見えず、聴けども聞えず、食えども其の味を知らず―大学―」と。すべてのものは、在るから見えるのではない。視るから在るのである。「老農」の「わけのわからぬ」とまで見ゆる姿の尊さがわからぬのは、実はこちらの恥なのである。こういう意味で私は柳宗元の種樹郭橐駝伝の植木屋の爺父をいつも懐かしく思う。

種樹郭橐駝（たくだ）伝

郭橐駝は始め何という名であったかわからない。せむしを病んでせぐくまって歩く格好が駱駝に似ているので人が皆駱駝駱駝と呼んだ。之を聞いた彼は、それは面白い。なる程当っていると言って、みずからも左様名のったということである。（橐は駝背のふくろのこと。）その郷を豊楽郷といい、長安の西に在る。其処で彼は植木屋を営んで居った。ところが長安の金持や菓物商人等で彼を珍重せぬ者はなかった。というのは彼の植える木は或は移植してもつかぬということはない。且つ非常に茂って、早く又沢山に実るからである。そこで他の植木屋等が見習って種々やって見るが、どうも及ばない。よって或人がどうしてそういう具合にゆくものかと聞いて見たところが、彼は答えた。いや、私が能く木をつかせ、しげらすわけではない。私はただ木の天に順って其の性を発揮するわけだ。一体植木の性というものは、その根本は舒びやかに。其の培うことは平らかに、其の土は故く、其の築は密でありたいもので、そうして置きさえすれば、後は動かすことも気遣うことも要らぬ。去って復たと顧みぬが好い。蒔く時は子の様に、置けば捨てた様にさえすれば、その天は全く其の性も得られる。故に私は其の成長を害せぬのみで、能く之を大きく茂らすのではない。其の実るのを抑耗せぬだけで、早く沢山実らすわけではない。他の同業者はそうではないのである。根は拳まり、土は易り、之を培うにも過不及がある。そうでなくても可愛がり過ぎたり、心配し過ぎたり、旦に視て暮に撫で、去くかと思えば又顧み、著しい者になると、その膚に爪を入れて生枯を験したり、根本を動かして疎密を視たりするものであるから、木の性は日に離れるのである。愛するというが実は害えて居るのであり、心配するというが、実は讐して居る。だから私に及ばぬのであって、私が何を能くしようか。

感心した問者は、それではお前さんの道を政治に適用したらどうだというと、彼は答えた。私は植木のことならわかるが、他のむずかしいことは私の能くすることではない。然し私は郷にいて人の長となって居る人達を見るに、好んでその命を煩しくしている様だ。あれでは大変下々を憐んでいる様で、実は結局禍して居る様なものだ。朝となく晩となく役人が来ては、それお上からの御達しだから田はこう耕さねばならぬ。田植はこうせねばならぬ、稲刈はこうせねばならぬ、蚤く糸を繰れ、縷を織れ、子供の衛生に注意せよ、鶏や豚を殖やせ……と鳴物入りで人々を集める。そこで下々の者はその度毎に御馳走を具えてはお役人を労わらねばならず、年中暇なしなので、却って経済的には生活に窮し、精神的には安立が得られない。だから人民が閉口して怠けるので、こういう点は政治もどうやら私の植木屋の仕事と似ているようだ。

問者が感嘆した。面白い。私は樹を養うことを問うて、人を養う術を得たと……山村水廓にもこんな老爺共が一人か二人居て呉れたらどんなに農村も潤いを有つことであろう。何の仕事でも、その道の達人、玄人と言わるる人は、其の玄堂、真理に達して居るが故に、丁度井戸を深く掘り下げて地下水に堀り当れば、すべての井戸の水と相通ずるように、すべてに通ずる原理を握るものである。植木屋は植木屋の哲学を有ち、田作りは田作りの哲学を有ち、米搗きは米搗きの哲学を有ち、深く其の事に専心することによって宇宙人生の玄秘を究め、天地に参って之と共に悠々たる生活を楽しみ得るに至るものである。植木屋のせむし爺や于越の野の老農（次章参照）が、世態や人生に就いて「哲学の煙」をふいているのも無理から

ぬことであろう。希くは私共は苦修参究の結果この辺までに遊びたいものである。

以上、諸種の態度に就いて縷々叙述し批判した。然しこは畢竟私共が自己修養の鑑にしたいが為に過ぎない。幾つかの態度を列記しては見たものの、実際に当って一人一人の人間を菓物の選別でもするように簡単に区分出来るものでもなく、又、然かすべきものでもない。唯かかる人物鑑識の範疇を以て人を見、己を見て、常に理想とする態度に自己を高めて行くよすがとすれば足りるのである。然らざれば我亦いつしか主知的巧言的態度に堕して、ミイラ取りがミイラになり了るの愚を敢えてなすに至るであろう。

農業に従事して思うこと

三浦　夏南

農業をしていてふと思うことがある。野菜は素人でも思ったよりも簡単に育てることが出来る。しかし、それを販売してお金を稼ごうと思うと育てることは大変難しくなる。自分たちが食べていく程度の野菜であれば狭い面積で栽培することが出来、手をかけることが出来る。多少虫に食われても自分たちが食べるものだから気にすることもなく、新鮮な内に食べることが出来るからとても美味しい。自分たちが育てたという思い入れもあるので、栄養価では表せないおいしさもそこには含まれている。販売となるとそうは行かない。虫食いや病気が付けば当然値段は落ちるし最悪の場合出荷できない可能性がある。重量が軽ければキロ単価で販売される野菜という商品は利益が落ちてしまう。育ちの揃いが悪ければ収穫出荷作業に狂いが出る。味や新鮮さは二の次で、見た目の綺麗さと流通の中での保存性の良さが問われてくる。そこに思い入れなどというナイーブなものが介在する余地などあろうはずがない。家族が一年間食べていくだけのお米は案外狭い土地で育てることが出来る。しかし、米を売って生計を立てようと思えば気が遠くなるほどの田を管理しなければならない。五人家族なら一反あまりもあれば十分なお米を収穫することが出来る。素人の我々でもこれなら一年間切り盛りできそうという広さである。草取りは大変だが、生きることを実感するには心地の良い大きさかもしれない。米の専業で食べていくのは苦しい。実家の祖父母は一町の田で米を育てていたが、とても生活していける面積ではない。営業に走り回り、自分たちで商品の差別化を図る大変優秀な農家さんが五町と言っていたと思う。普通に出荷していくなら倍以上の面積が必要であろう。米はすべて機械化がされているとは言え、トラクターで耕すだけでも大変な面積である。自分たちが食べる程度の畑を鍬や鋤で耕し、畝を立てるのはとても楽しく時間を忘れるほどである。しかし、販売用のネギの畝立ては機械作業でも重労働である。手作業は楽しい。金銭的に言えばそこには何の生産性もないが土に触れるということはそれだけで楽しいことである。しかし機械でこれを行うとこれほどしんどいことはない。手作業の何倍、何十倍の作業効率であろうが、精神的に疲れてしまう。

天地自然は親である。子であるところの我々がこの大地に立って生きていくこ

とは息をするが如く自然で楽しいのが当たり前である。そこに祖先の積み重ねてきた伝統と英知が与えられている。これで生きていくことがつらく苦しいはずがない。しかし先述の如く簡単で楽しいはずの生きるということがこんなにも大変で苦しくなっているのは何か間違っているに違いない。人生は厳しく、苦しみに耐え頑張ることは美徳と言われるが、それは近代人の傲慢と偏見であり、親である神々への不孝に他ならない。親が全てを与えてくれていることに感謝することなく妄りに苦労と努力を語るべきではない。私は近代化や文明を盲目的に否定するものではないが、我々人間の基礎には簡単で安心で楽しい子供のような生活がなければならない。文明を否定するのではなく、基本は斯くあるべきだと考えるのである。家族と働き、取れたものを食べて生きていくことはとても楽しい。働くことは本来楽しいことである。こんな当たり前のことがこんなにもつらく苦しくなっているということは人類の一大事である。この当たり前を取り戻すために努力することが、農本に目覚めた我々の使命ではないかと思う。

とよくも農園だより

三浦　杏奈

とよくも農園便りを書き始めてはや二年が経ち、農業を始めてからは約三年が経ちました。読み返してみると、当時の農業事情や自分が考えていたことが思い出されますが、正直、大変なことだらけの三年間でした。父が「農業は段取り九割」と言っていたことが思い返されます。経験のない私たちは、仕事の優先順位や風・雨・日照りによる被害の予想が立たず、「こうしておけば良かった」と思うことが幾度となくありました。それでも、農園だよりに書かれている言葉の端々から、家族で協力して歩んできた日々を感じとることができ、農業をすることを家族の道として選択できたことを誇りに思います。全員で協力して出荷作業に明け暮れ、育てた野菜の美味しさを食卓で語らい、明日の仕事の予定を家族みんなで一緒に考える日々が、私達家族の今の姿を支えているように思います。

今月より主人も仕事を辞め、農業の方に家族みんなで専念することにしました。会社務めだった主人のスケジュールは、農業が仕事の私達とはなかなか合わず、夜遅くに帰って一人だけ別でご飯を食べることも多く、お風呂も息子と一緒に入る時間はありませんでした。主人が加わってからは、家族全員早寝早起き、農業中心の生活へと変わりました。一家揃っての朝の参拝と神想観は何とも清々しく、家庭菜園から取ってきたカブや大根の浅漬けとお味噌汁、お結びを朝ご飯で食べます。義兄と主人が農業に出発した後、家事を一通り済ませ、息子たちの支度をして畑に仕事の手伝いに行く日もあります。今の季節は一日中涼しいので、息子たちをなるべく畑に連れていき、父親の仕事をする姿を見せ、お手伝いが出来た時には思いっきり褒めるようにしています。二人とも、幼いながらに家族の役に立ちたい気持ちがあるようで、仕事を頼むと一生懸命頑張っています。

今月は、「収穫の秋」十一月でしたので、里芋、ネギの収穫はもちろん、家庭菜園のジャガイモやサツマイモ、大根、白菜、キャベツ、ブロッコリーとたくさんのお野菜が収穫でき、食卓も賑わいました。来月は、残りの里芋の掘りあげ、アスパラのハウスの伏せ込み等、今年の集大成となる仕事が残っています。主人も加わり、一家揃っての「とよくも農園」がスタートしました。今まで以上に家族一致団結し、飛躍する一年となりますよう精進しますので、来月号からも楽しみに読んで頂ければ幸いです。

★今後の予定

来月も、今月に引き続き勉強会は休止致します。復帰の目途が立ちましたら、本稿にてご連絡差し上げます。

★一燈照偶　万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

- 一般会員　三千円
- 賛助会員　一万円
- 特別賛助会員　三万円
- 支援会員　一万円

★お知らせ

新型コロナウイルス感染症が流行している状況を受け、参加者の健康と安全を最優先に考慮し、醒庵忌の開催を中止することといたしました。何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。